

## 誰のための学問

太田政男（大東文化大学）

手元に、これだけは取っておこうと決めた2冊のファイルがあって、それはいずれも汚れてはいるが薄いブルーのB4、KOKUYOのファイルである。背表紙にマジックで、「労働者教育研究」と「成人教育成立史研究」とある。1969年度の大学院のゼミであり、前者は宮原誠一先生、後者は碓井正久先生のゼミであった。

その年にぼくは学部を卒業して大学院の修士課程に進んだところであり、佐藤一子さんは博士課程に進んだはずである。1969年という年度ですぐわかるように、東大紛争（当事者であるわれわれは「闘争」と呼んだが）の直後であった。1月は時計台の攻防があり、3月に封鎖解除、ぼくは6月卒業だった。不勉強のままに大学院に入ったので、僕らの学年は「紛争世代」と呼ばれ、学力が低いと叱られた。語学の試験などは問題ごとにABCの5段階評価がつけられるのだが、ある先生からは「EEC」と揶揄されたりもした。

それまでの社会教育研究室は大学院生が比較的少なかったのだが、佐藤さんの学年から始まって各学年には2、3人ずつの院生がおり、ある程度まとまった「世代」を形成しつつあった。その先頭にいたのが佐藤さんだった。

東大紛争についてはさまざまな評価が可能であり事行われているが、すべての構成員による大学自治を訴え、大学が誰のために存在し、何のために学問があるのかを問いかけたところに意義があったとぼくは思っている。ぼくらの世代は社会教育研究の意味やあり方について、青臭さをひきづりながらけっこう生真面目に議論し合ってきた。研究室の運営についても研究室会議を設けて、学生を含むすべての人が参加して行う慣行をつくった。

宮原先生が退官後は、先生を中心に「よんど会」に拠りながら研究をすすめたし、小川利夫、藤岡貞彦両氏をはじめとする研究室の諸先輩には、世代としての形成において、また一人ひとりの研究者としての自立と成長においても大変なお世話になった。そこでも佐藤さんは世代の代表でありリーダーであった。

青いファイルに戻ろう。どちらのファイルも、手書きの原稿を「青刷り」でコピーしたレポートでいっぱいであるが、佐藤さんは「成人教育成立史研究」の方のゼミ長だった。ゼミ員のそれぞれが対象の国や地域、分野を研究分担してすすめたのだが、佐藤さんはライシウム運動などアメリカの担当をしながら、全体にコミットしていた。それは、視野の広さや能力の高さにおいて佐藤さんでなければできない役割だった。それは後に、「近代社会教育の理念と歴史」（島田・藤岡編『社会教育概論』）に結実する。

佐藤さんの研究の広さや高さもさることながら、感心するのは社会教育の実践や運動にとっての肝心なことを押さえる着眼のユニークさである。イタリアの文化協同や、その後のNPOへの関心などは佐藤さんらしさをつくるものでもあり、後になってその大事さに気づかされたものである。佐藤さんは、それらの仕事を楽しそうにやっておられるように見えたが、ときどき会うと「私、今ガリ勉してんのよ」などと言うことがあり、事実その後には著作が生み出されたが、それは社会教育の民衆的創造へ向けての責任感によるものではないかと思う。

今度著された『現代社会教育学』も、その壮大なスケールにおいて、オールラウンダーである佐藤さんしか書けないものだと思う。そして、そこに収められた「アクション・リサーチと社会教育」は、誰のための学問かを問うた初心を一貫していることを示している。世代だけでない学界のリーダーとして今後もお元気にご活躍されることを願います。